

# 仮面ライダーインセクト

大家主

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、中野紺はあることに巻き込まれてしました。それは時の王オーマジオウが生まれるはずだった世界を取り戻すこと。いろいろなライダーに出会い、中野紺は全てを守ることができるのか？

# 目次

全てを繋げ仮面ライダー	1
動物 コンボ タカトラバッタ	5
いろいろな スイッチ	1. 2. 3. 4
16	
閑話 再三再四	23
希望の指輪 ショータイム	27
フルーツ 花道Let's DANCE	37
閑話 五臓六腑	43
赤い車 フルスロットル	47
開眼 偉人のパーカー	60
閑話 七転八倒	69



# 全てを繋げ仮面ライダー

彼の名は中野紺。(なかのこん) 18歳。彼は時の王、オーマジオウの騎士となる運命をたどっていた。おつと失礼、私の自己紹介がまだだったね。我が名はウオズ。時の王、オーマジオウの家臣である。話しを戻そう。彼は、仮面ライダーを助けるという使命を課されていた。

「よし、今日から夏休みだ。近くの森で昆虫採取だ!!」

俺の自転車に乗って行こうとしたらかごのところにメダルが置いてあった。

「なんだ、このメダル? まあ、いいや。」

そのメダルをポケットに入れて自転車に乗った。

「よし、到着!!」

俺は、森で昆虫採取を始めた。

キラキラ?

「ん? さっきあそこが光ったような感じがしたんだけど。行ってみるか。我が

俺は、光った方へ行ってみた。

「なんだあの昆虫は!!」

白いフォルムに光輝くトンボがいた。

「ギンヤンマかそれとも、」

どこかへ飛んで行こうとしている。

「待って!!」

俺のことを気にせず飛んで行こうとしている。俺はそのトンボを追いかけていった。そして森から出てすぐの街角へトンボが曲がった。俺もつかさず曲がった。するとそこは僕の知ってる町ではなかった。

「(ハハ)どこ?」

すると前から知らない人が現れた。

「はじめまして我が騎士。」

「はい?」

「あなたは時の王、オーマジオウのを手助けする時の騎士、ドラグニルとなるのです。」

「いきなり出てきてきてなんですかあなたは。」

「申し上げます、我が騎士。我が名はウオズ。」

「ウオズか。なに言っているかわかっている?」

「分かっていますとも。」

「まあ、面白そうだし話しだけ聞いておこうか。」

「我が魔王オーマジオウは、時の王となるはずだったのだが、何者かにより時の王と成れなかったのだ。この本によれば、時の王オーマジオウを助ける時の騎士がこの場所に現れると書かれていた。それが君だ!!」

「あゝ、人違いじゃあないでしょうか。第一、ここに人が通らない訳、」

俺は周りを見渡したが人一人いなかった。人の通る気配すらなかった。

「は、俺になるのか。で、学業にも専念したいんで、学業の邪魔にならないなら付き合ってもいいよ俺の力が必要なんだから。」

「その通りだ。」

「で、俺は何をすればいいんだ？」

「仮面ライダーを守ってもらいたい。」

「仮面ライダー？」

「そう、仮面ライダーとは人を助けるヒーローだ。ある者によつて仮面ライダーが歴史から消えようとしている。」

「なんで消そうとしているの？」

「それはわからない。」

「そうなんだ。」

「学業については問題ない。」

「なんで？」

「時を超えるからだ!!」

「はい？」

そう言つてウオズは、首に巻いている布を俺に巻いた。次の瞬間目の前には、見たことのない風景が広がっていた。

「ここは、2011年、仮面ライダーオーズの世界だ!!」

「どこだそこは!!」

「こうして俺の戦いは始まりを迎えた。」



# 動物 コンボ タカトラバツタ

「話しはだいたいわかった。」

ウオズが話してくれた。

仮面ライダーオーズは、グリードと戦う三枚のメダルを使って変身するライダーのよ  
うだ。

「ウオズ、もしかしてメダルってこれのことかな？」

「我が騎士、それに間違いないね。」

「へえー。」

その時、上下三色に別れている怪人が現れた。

「あれが、仮面ライダーオーズだ。」

「あのベルトに入っているのがメダルか。」

いきなりバツタの怪人が現れた。オーズは俺達を気づいたようで。

「その人、危ないから離れてて!!」

「わかった!!」

俺達は、返して物陰に隠れた。

スキヤニングチャージ

「せいやく!!」

バッタの怪人は、四散した。そして、右腕が妙にゴツイ人が現れて、バッタの怪人から出たメダルを集め始めた。

「これは、俺のメダルだ!!」

「アंक急ぎ過ぎ。」

こつちにも何枚か来たので拾って上げた。

オーズがこつちに気づいた時、オーズの背後から何か現れ強烈なキックが炸裂した。

「わー!!」

「なんだ、お前?」

黒い怪人だった。見た感じ、ゾウムシ感が凄かった。

アंकの呼び掛けに何も反応も示さなかった。

「なんか知らないけど、こいつヤバイやつだよな。」

「映二、絶対奪われるんじゃないぞ!!」

「分かってるって。はっ!!」

オーズの攻撃に何一つ反応を示さなかった。

「アंक、コンボいける?」

「しょうがねえな。奪われるなよ!!」

「分かってるって。」

オーズは、ベルトのメダルを入れ替えた。

「変身!!」

ライオントラチーター

ラタラタラトラーター

オーズは、体全体黄色に染まった。

「せいやく!!」

チーターの足で高速に走り、トラの爪で切り裂いたが、何の反応も示さなかった。

「アंक、攻撃が効いてないよ。」

「ちっ」

「アंकなんかなの?」

「なんだ、あいつ?」

「アंक、早く!!」

黒い怪人は、足に力を入れた。

「ダークキック。」

「あゝゝ!!」

「映二!!」

「ウオズなんかならないの?」

「我が騎士。そんなこと言われても。」

その時だった。銀色のトンボが飛んで来た。

「あのトンボ!!」

そのトンボが、メダルを落としていった。

「これは、は、」

「我が騎士。これはコアメダル。これを使って変身するのです。」「これが俺しか出来ない事か!!」

俺は、オーズのところへいった。

「これ以上は、やらせない!!」

「なんだ、お前。」

「君逃げて!!」

「やだね。こんなに頑張っているあんたがボロボロなのに俺が逃げてどうするんだよ!!」

「でも。」

「オーズって言ったか。ベルトを貸せ!!」

「でも、これは君には使えない。」

「ものは試しだ。」

「映二!! なんてか知らねえが、ベルト絶対渡すんじゃないぞ!!」

「映二か、どっちも倒れたら意味ないだろう!! それに、そんな傷だらけで動けないだろ!! 俺を信じろ!!」

「わかった!!」

「映二!!」

「君を信じるよ。」

「ありがとう。」

「映二!!」

「ふう。」

「お前に何が出来る?」

「やっとしやべったと思っただらそれか。」

「やれるもんならやってみろ!!」

「おお!! アンク、これ返すわ。」

ベルトに入っていたメダルを投げ返した。

「さてと、これ使ってみるか。」

「なんだそのメダルは？」

カチツカチツ

「変身!!」

テレレ

カブト

ダンゴ

アメンボ

ト・ン・ボ

トンボ トンボ

「なんだそれは。」

「これが、俺の変身か。行くぜ!!」

頭はクワガタの一本バージョンで、体はダンゴムシの外装で腕には盾が付いていた。足は黒く爪先と踵に白い斑点がついていた。そして、俺は戦おうとしたがある疑問を持つ。

「これ戦えないような、」

(カブトは頭突き、ダンゴムシは防御、アメンボは水上移動。)

「頭の角で頭突き以外の攻撃方法がない!!」

「お前は馬鹿か？まあいい、こっちからいかせてもらおう!!」  
「ちよつと待った〜!!」

案の定俺は飛ばされて、近くの池に落ちた。

「馬鹿め、丸腰で来るかね普通。次はお前だオーズ!!」

「くっ」

(このままでいいのか？このまま戦つてもまた同じ事になるだけだ。何か手はないのか？)

その時、上に光るものが見えた。

(あれはいつたい?)

俺の頭に直感がよぎった。

(あれさえ届けば勝てる。)

俺はそう思い、その光るものに手をのばした。

「おりゃー!!」

「なに?」

「仮面ライダーインセクト。復活!!」

俺の手には、トンボの形をした剣があつた。

「これが俺の勝利への鍵だ!!」

俺は、剣を鞘から抜いて、鞘を腰に付けた。

「さっきまで弱かったやつが武器を持ったところだ。」

「それはどうかな。」

俺は、さっき拾ったメダルを剣に入れた。

スリーメダルズ

スローイント

「行くぜ!!」

俺は、黒い怪人に切りかかった。

「くっ。」

白い怪人は、攻撃をくらった。

「こんな力を隠していたのか!!」

「俺もやるでしょ。」

「ならば。」

黒い怪人は突然俺の目の前から消えた。と、思ったが、俺の前に現れて、

俺に、パンチを入れた。

当然ガードしていない俺は、また同じ池に落ちていった。

「同じ手は、くらうか!!」



俺は足に力を入れ、アメンボの力を使い水面に浮いた。

「なんだと!!」

「よく考えてみたら、俺の足アメンボだったは!!」

「ならなんでさつき落ちた!!」

「忘れてた〜。」

「は?」

「さてと再開だ!!」

俺は、剣の上に飛ばし体を丸めて玉となって途中で大きくなりながら、黒い怪人に突っ込んでいった。

「こんなもの。」

黒い怪人は、体全体で止めようとしたが、耐えきれず飛んでいった。俺は、黒い怪人が飛んでいくとどうしに外層を外し剣を回収した。

「これでとどめだ!!」

スキヤニングチャージ

「おりゃー!!」

黒い怪人が落ちてきたと同時に必殺技を打った。

「ぐあ〜!!」

黒い怪人は、必殺技をくらい後ろに吹っ飛んだ。

「お前はいった何者なんだ!!」

「私か、私に勝ったから教えてやろう。俺の名はウィービル、仮面ライダーを全て消そうとしている軍団の一人だ!!まだ俺には兄弟がいる、お前は倒せるかな?お前の名は?」

「仮面ライダーインセクト。中野紺だ!!」

「中野紺か覚えておけ。ハハハ〜」

カルスは、四散した。

俺は変身を解除し、オーズのところへいった。

「大丈夫かオーズ?」

「その呼び方やめて。ちゃんと名前があるから、俺は火野映二。君は?」

「俺は、中野紺だ。」

「中野紺か、よろしく!!」

「ああ、よろしく映二。それと返すよベルト。」

「ありがとう。ところでそのメダルどこで手に入れたの?」

「えーと、いたいた。あのトンボが持ってきたんだ。」

「へえー。あれ新しいカンドロイドじゃないかな。」

「おい、そこのお前そのメダル寄越しな!!」

「アंकそれはないんじゃないか。守ってくれたんだし。」

「あつ、そういえば、もう一枚あったな。」

ポケットからメダルを取り出す。その瞬間、アंकがメダルを奪った。

「これは、俺のメダルだ!!」

アंकがメダルを奪ったが、トンボのカンドロイドがメダルを取って俺のところに持ってきた。

「ありがとうね。」

「ちっ」

「どうやら無理みたいだね、アंक。」

「お前にそのメダル、くれてやる。」

「紺この後、クスクシエに寄ってかないか？俺が働いている所なんだけど。」

「それはうれしいんだけど、急ぎの用があるんで。」

「それは残念だな。」

「また機会があれば行きます。じゃね〜。」

「バイバイ〜。」

# いろんな スイッチ 1. 2. 3. 4

「ウオズ？ここは？」

「ここは2011年仮面ライダーフォーゼの世界だね。」

「へえー。」

俺達は、天の川学園に来た。

「で、この制服がここの制服なんだ。」

俺は、ウオズに渡された制服を着ている。

「その君、そろそろ学校始まるから入りなさい。」

「はい！ウオズは入らないの？」

「私にはその服が性に合わないの。」

「そうなんだ。じゃ後でウオズ。」

そういつて入っていった。

当然俺にはクラスがないので、ばれないように動いた。

特に何もなく1時間経過した。

「別に制服着てきなくても良かったな。」

休み時間に入って学校が騒ぎはじめた。

「なんかあったのか？」

廊下のまの窓から覗いて見ると運動場に茶色い怪人が立っていた。

「ここに仮面ライダーがいると聞いた。出来来なかったらこの学校を今すぐ破壊する!!」

「やべ!!」

俺は、急いで運動場にめ向かった。

俺が運動場に着いたときには仮面ライダーフォーゼが立っていた。

「お前にこの学園を壊しさせたりしない。なぜなら、この学園で俺は全校生徒とダチになる男だからな。」

「はじめからここを壊す気はない。お前を呼ぶために言ったまでだ。さてと、戦いをはじめようではないか!!」

「タイマン張らせてもらうぜ。」

仮面ライダーフォーゼと茶色い怪人と戦いはじめた。フォーゼは2番のランチャー、4番のレーザーを使って攻撃をした。だが、カルスの前で爆発した。カルスは、2ふりの剣で切ったのであった。

「如月!!このスイッチを使え!!」

「させるか!!」

茶色い怪人は、投げられたスイッチを剣で遠くの方に、打った。

「ホームラン!!これでお前は終わりだ!!」

カルスは、剣に力を貯めて、ふった。

「うあ〜!!」

仮面ライダーフォーゼこと如月弦太郎は、勢いで飛んでいって変身が解けた。

「如月!!」

「弦ちゃん!!」

二人の男女の生徒が弦太郎に近づこうとしたが、

「仮面ライダーを完全に倒すまで近づきさせるか!」

茶色い怪人はエネルギー弾を二人の前へ放った。

「さてと、これでとどめだ!!」

その時、茶色い怪人に何か飛んできた。

「なんだ!!」

前みたトンボが同じようなトンボを二体連れてきた。

「あれはいったい?」

二人が驚いてる時に俺は弦太郎に近づいた。

「大丈夫か？」

「あんたは？」

「俺は、あいつを倒すためにきた、中野紺だ!!」

「逃げろ!!俺はダチを守るために戦う。あんたは、逃げてろ!!」

「バカ言え。めちやくちや傷だらけじゃないか。いいからベルトを貸せ!!」

「貸せって?どうする気だ?」

「ダチを助けるために力貸そうって言ってるんだよ!!」

「なら、今日からあんたは俺のダチだ!!」

そういつて弦太郎は立ってベルトを紺に貸した。

「任せた!!」

「なにをこちやこちやいつている。」

「お前を倒すための作戦会議だ!!」

さつき飛んできたトンボの一体が俺の前へきた。

「力貸してくれるのか?よし。」

俺はそいつを手に取り1番のロケットスイッチと入れ替えた。

「お前、名前は？」

「我が名はチック、ウィービルから聞いている。」

「なら話しは早い。」

3・2・1

「お前を倒す。変身!!」

俺の体にフオーゼのスーツが着いた。色が白から緑に変わっていた。

「さてと、今度は俺の番だ!!」

さつき差し込んだスイッチを押した。

ドラゴンフライON

どこからか大きなトンボと小さなトンボが飛んできて俺の前へ着陸しパーツが俺にくっついた。背には羽が尻にはしつぽがついた。俺の目に、小さい方が銃の形になった。

「なんかすごいことになったな。」

「姿が変わっても同じこと。」

「どうかかな?」

「なに?」

俺は羽を使って空へ飛び、しつぽを使ってチツクを空へ飛ばし、チツクに連射した。

「ぐあゝゝ!!」

「例えお前が強くても足が地についていないならどうにもならないだろ。」



「俺が何もできないとでも思ったか。」

「なに？」

チツクは空中で回り始めた。

「なに、もう遅いわ!!」

俺はレバーを倒した。

ドラゴンフライ

リミットブレイク

「ぐあゝゝ!!」

「頭ががら空きなんだよ!!」

チツクは空中で四散した。

「ふー」

「俺の名は、歌星賢吾だ。」

「私の名前は、城島ユウキ!!」

「お前はいつたい？」

歌星賢吾が俺に聞いてきた。

「俺は中野紺。仮面ライダーインセクトだ!!」

俺は弦太郎にベルトを返した。

「俺とダチの証だ!!」

弦太郎は拳を突きだした。俺は悟った。俺は拳を突きだして証の動作をした。

「何でお前は、それを知っている?」

「え? 喧嘩もしてないのに拳を突き出すのは、これくらいじゃないの?」

「は?」

## 閑話 再三再四

俺とウオズはもといた現在に戻ってきた。

「仮面ライダーってまだいるの？」

「ああいるさ、我が騎士。」

「まじか、1日2ヶ所でもいいな。疲れた。」

「まあ、焦りの要でないしいだろう。」

「俺は家に帰るけど、ウオズはどうするの？」

「では、我が騎士の家に行ってみようかな。」

「別にいいけど。じゃあ行こうか。」

俺達は、俺の家に向かった。

「母さん、ただいま。」

「おかえりなさい。あら、後ろの人は？」

「ああ、ウオズ。家に遊びにきたんだ。」

「じゃあ、何か飲み物を用意するわ。何か飲むかしら。」

「では、あれば紅茶で。」

「紺は？」

「お茶でいいよ。」

「どこで飲む？」

「俺の部屋で。」

「わかったわ。持っていくわね。」

「ありがとうね。ウオズこつち。」

「お邪魔します。」

俺たちは、俺の部屋に入った。

俺は熱かったので窓を開けるとさつきみたトンボたちが入ってきた。トンボたちは各自何か持っていた。それを置いて俺の机に止まると、一体は缶へ、一体はスイッチへ、一体はハンバーガーショップにあるコーンやサラダが入っている容器みたいになってスイッチが飛び出した。トンボたちが置いた物は、二個のスイッチと三枚のメダルだった。

「何でこんな物を持ってきたんだろう？」

「この先何があるかわからない。持って置いて損はないだろう。」

「そうだね。ところでウオズ？このメダルやスイッチ、何か名前ないの？普通の物じゃないさそうだし。」

「そうだね、我が騎士。メダルはオーメダル、

銀色のメダルはセルメダル、スイッチはアストロスイッチと言うんだ。」

「へえー。」

コンコン

「紺、飲み物を持ってきたわよ。ドアを開けてくれないかしら。」

「はい。」

俺はドアを開けた。

「はい、どうぞ。ウオズさん、紺と末長く仲良くしてくださいね。」

「わかっております。」

「じゃあね。私は、下にいるからね。ゆっくりして行ってね。」

母さんは、そういつて部屋を出ていった。

「ウオズ、具体的にどんなライダーがいるの?」

「魔法使いの仮面ライダーウィザードやフルーツ武者の仮面ライダーの鎧武などがあるね。」

「へえー、楽しみだなあ。で、明日はどこに行くの?」

「ではさっき言った、仮面ライダーウィザードと仮面ライダー鎧武の世界に行くことにしようか。」

「魔法使いか。楽しみだなあ。フルーツ武者も気になるし。」

「その名前で覚えなくてくださいよ、我が騎士。」

「分かっているって。」

「ならいいのだが。」

それからウオズと明日のことについて話し合った。

# 希望の指輪 ショータイム

次の日

「母さんいつてきます。」

「行ってらっしゃい。」

俺は昨日、ウオズと会ったところにいった。

昨日、ウオズと約束したのだ。

「おはよう、ウオズ。」

「やあ、我が騎士。」

「で、今日はどこへ行くの？」

「今日は仮面ライダーウィザードと仮面ライダー鎧武のところへ行くのさ。我が騎士。」

「わかった。じゃあ行こうか。」

俺とウオズはまず、仮面ライダーウィザードのところへいった。

ここは2012年、仮面ライダーウィザードの世界。ウオズから聞くと仮面ライダーウィザードは、名前の通り魔法使いのライダーらしい。魔法使いの時点で、仮面ライダーになる必要はないと思うが、ウオズが言うにそういつて活動しているらしい。

念のために今持っているトンボたちを放った。

が、すぐに戻ってきたトンボがいた。リングの上が大きな指輪を持ってきた。

「なんだ？この指輪は？」

「我が騎士、それはウィザードリング。仮面ライダーウィザードが持っている。指輪のひとつだ。その指輪は昨日我が騎士の物のようみたいだね。」

指輪の上の部分には、緑色でトンボが彫られていた。

「一樣この世界のらしいからつけておくか。」

俺は、左手の中指に指輪をはめた。

「まずは、仮面ライダーウィザードを探さないといけないのだけど。どこにいったら会えるんだ？」

「おそらく、面影堂にいるだろう。」

「ん？」

「面影堂とは、仮面ライダーウィザードが拠点としている店だ。」

「じゃあ、そこに行けば、仮面ライダーウィザードに会えるかも。行ってみよう。」

俺たちは、面影堂に向かった。

「ここが面影堂か。お邪魔します。」

「いらつしやい。何か用かね？」



「えーと、ウオズ、仮面ライダーウィザードとか言えないから、変身者の名前教えて。」  
「操真晴人だ。」

「ありがとう。操真晴人さんいませんか？」

「晴人さんは今、出かけています。」

奥から全体的に白い服を着た女性が出てきた。

「そうなんだ。じゃまた出直してきます。」

その時、窓から赤色のトンボが飛んできた。そしてどこかへ飛んで行こうとした。

「ついてこいと？」

トンボがこつちを向いて、こくりとした。

「よしいくか。」

俺は、トンボを追いかけていった。

そこには、怪物と戦う仮面ライダーウィザードがいた。

チヨロイイネ！キツクストライク！サイコロ！

怪物は仮面ライダーウィザードの必殺技で四散した。

「フイ〜」

「あなたが操真晴人さんですか？」

俺は、仮面ライダーウィザードに聞いた。

「そう。俺は操真晴人。君は？」

「俺は、中野紺。同じように言うならば仮面ライダーインセクトかな。」

その時、俺たちの目の前に緑色に光る怪人が現れた。

「俺の名は、ステイド。話しは聞いている。」

「またお前らか。」

「中野、知り合いか？」

「知り合いに見えるか？こいつを倒すためにここにきたんだよ。操真晴人さん、ベルト貸して。」

「なぜだい？」

「俺は、ベルトを持ってないんだよ。」

「なら、君が戦わなくてもいいんじゃないか。」

そう言って操真晴人はベルトを展開させた。

シャバジュビタツチヘンシン

シャバジュビタツチヘンシン

ファイアプリーズ

ヒー ヒー ヒヒヒー

操真晴人は、仮面ライダーウイザードに変身した。

「操真晴人さん、そいつは危ない。」

「わかったよ。」

そう言うのと、仮面ライダーウィザードは、剣を出した。

コネクトプリーズ

「仮面ライダー、お前は俺が倒す。」

「さあ、ショータイムだ。」

仮面ライダーウィザードは戦い始めた。

ステイドは、銃を出して連射し始めた。負けじと仮面ライダーウィザードも剣を銃に変えた。

ステイドは仮面ライダーウィザードに連射をし、行動させないようにした。

「なかなか攻撃させてくれないね。ならこれはどうかな。」

シャバジユビタツチヘンシン

シャバジユビタツチヘンシン

ウオータープリーズ

スイ〜スイ〜スイ〜スイ〜

仮面ライダーウィザードウオーターフォームに変わった。

「姿が変わったところで。」

「なに?」

ステイドは、銃を乱射するとその弾丸がステイドに変わり、仮面ライダーウィザードの周りを囲い、同時に乱射し始めた。

「ぐあゝゝ」

さすがの仮面ライダーウィザードも耐えきれず、変身が解けてしまった。それと同時にカルステイドの分身も消えた。

「これで仮面ライダーも終わりだ。」

そういつて銃に力を入れ始めた。

「ヤバい!!」

俺は、無我夢中に操真晴人さんのもとへいった。その時だった。俺の飛ばしていったトンボたちが、さっきの赤いトンボを連れてきた。そして、ステイドの銃に何か弾を入れて、爆発させた。

「ナイス、トンボたち!!」

「あれは君のかい?」

「ああ、あれは俺の仲間たちだ。そうじゃなくて、ベルト貸して!!あいつは、俺しか倒せないんだよ。」

「そんなことがあるのか?」

「さつきみたる。俺を信じてくれ。」

操真晴人さんは、少し考えると俺にベルトを渡してくれた。

「俺ができないことなら、君がみんなの希望になってくれ!!」

「わかった!!。」

俺は、ベルトの巻いて、

シャバジユビタツチヘンシン

シャバジユビタツチヘンシン

「変身!!」

ドラゴンプリーズ

ドラ・ドラ・ドラゴーン

俺の体には、仮面ライダーウイザードのスーツが付き、赤い部分は緑色に変わり、どこから大きなトンボが飛んできて、俺の後ろにつくと頭は右拳に、羽が肩に、胴は腰について、尾は左足についた。

「お前か。」

「?。」

「お前のことは、俺の分身を通して知っている。」

「なんとなく、予想はしていたけど、本当だったとは。」

「甘くみるなよ。」

「望むところだ。」

俺は、ジャンプして、腰をひねり右拳を突きだした。ステイドは、腕をクロスさせてガードした。ステイドの下には、ひびが入った。

「今までで、一番強いんじゃない。」

「それは、褒め言葉としてもらっておくよ！」

ステイドは、俺の腹に蹴りを入れた。

「ぐは。」

俺は、後ろに飛んでいった。

「どうした。これで終わりか？」

「これで終わってたまるか。」

俺は、左足に力を入れて突っ込んだ。

「なに？」

「えっ？」

俺は、ステイドの視界から消えたみただった。俺は、現在ステイドの後ろにいた。

「なるほど。」

俺は、ステイドに右拳を突きだした。ステイドは、無防備で、攻撃されたのでだいぶ

吹っ飛んだ。

「こしやくな。」

ステイドは、銃を突きだし乱射して、分身を出した。だが、今の俺には、関係なかった。俺は、左足に力を入れて、右拳を突きだしその波動で分身を倒した。

「なんだと。」

「これで終わりだ。」

ルパッチマジックタツチゴ―

ルパッチマジックタツチゴ―

超いいね最高〜

「ぐあ〜!!」

ステイドは四散した。

その後、俺は操真晴人さんにベルトを返して、面影堂に送った。

「じゃあ、君も魔法使いなのかね？」

面影堂のおじさんに聞かれた。

「そうなるのかな。まあ、俺は力を一時的に借りているって方が正しいんだけど。」

「すごい!!君魔法使いなの?すごいなく〜、僕も魔法使いになりたいんだけどなれなかつたけど、ここで修行して、いつか魔法使いになるんだ!!」

「そうなるんだ〜」

俺は、その言葉を軽くスルーした。



## フルーツ 花道Let, sDANCE

ここは、2013年。仮面ライダー鎧武の世界だ。ウオズに聞くと、フルーツの力を使って戦う武者ライダーのようだ。俺は思った。フルーツと武者がどう繋いだらそんなことになるのかと。

俺とウオズは、毎回お馴染みのライダーのいると思われるところへ行こうとした。だが今回は、そんなことしなかったというか、ここに着いたときには、既に仮面ライダー鎧武は倒されていた。

「我が騎士。あの人が、仮面ライダー鎧武だ。」

「嫌でも分かるは!!ウオズ、どうすればいい?」

「そんなことは簡単だよ、我が騎士。仮面ライダー鎧武からベルトを貸してもらえばいいのだよ。」

「今回も、トンボが来てこうアイテムを落としてくれた!!」

今回もトンボが、アイテムを持ってきたのだった。

「我が騎士。それはロックシードと言うものだ。」

「よし。」

俺は意を決して飛び込んだ。

「消え失せライダー!!」

「ちよつと待ったろ!!」

「ん?」

「君は?」

「俺は、中野紺。仮面ライダーインセクトだ!!」

「やはりきたか。俺の名はシエイ、兄弟から話しを聞いている。さあ、来い!! 変身するまで待つてやる。」

「俺としては、変身したいのだけど、ベルトがないからね。」

シエイは、今までのやつと性格が変わっていた。

「さてと、仮面ライダー鎧武だっけ? ベルトを貸してくれない?」

「いや、無理だ。俺のベルトを仲間も試したが誰も変身できなかったぞ。」

「あくそそれね。俺には、関係ないんだよね。」

「なに言っている?」

「まっ貸して貰えれば分かるって。」

「貸せばいいんだな。」

仮面ライダー鎧武は、体を起こしてベルトを貸してくれた。

「ありがとう。後で返すから。」

「やっとか。」

「待っててありがとうね〜。さてと。」

俺はベルトを腰に巻いて、ロックシードを開いた。

「なんだ、あのロックシードは？」

ドラゴンフライ

俺の頭上に、チャック出現し俺はロックシードをベルトにはめた。

ロックオン

セイヤー!!

ドラゴンフライアーム

昆虫達の

オンパレード

チャックが開き中からトンボが出てきた。

俺の体には、鎧武のスーツが装着されてトンボの頭だけ取れて、俺の頭にはまった。

そして、頭が展開した。頭に触覚、体にトンボの顔という形になった。

「よし、勝負だ。」

「やっとか。ぼーぼーにしてやるよ。」

俺は、変身した時に付いていた弓で戦い始めた。俺は、弓を引きシエイに撃った。矢は全部シエイの元へいったが、シエイが自分の剣で全部切った。

「今度は、こつちから行くぞ!!」

シエイは、こつちへ突っ込んできた。しょうがないので腰にある剣を使って対抗した。

「くっ」

「どうした、どうした? 来いよ!!」

「やってやろうか。」

俺はシエイに弓を当てて引き金を引いた。

「くっ。なかなかやるね。」

シエイは、怯んでいるようだった。俺は、この弓に違和感をおぼえた。手持ち部分の他に、スイッチがあつたのだ。違和感があつた俺は、そのスイッチを押してみた。すると、弓が展開して盾になったのだ。

「ありかよ。よし!!」

「なにやっている行くぞ。」

シエイは切りかかったが、俺は盾で防御して、剣を弾いた。俺はその瞬間シエイを切った。

「これでトドメだ!!」

俺は、盾の上に飛ばした。すると盾から矢が出てきてシエイの周りは矢の雨となった。そして俺はシエイを切った。

「ぐはー!!」

シエイは、四散した。

俺は、仮面ライダー鎧武のところへ行った。

「大丈夫か鎧武?」

「その呼び方はやめてくれ。俺は、葛葉光太よろしく。君は?」

「俺は、仮面ライダーインセクトこと中野紺、よろしく。」

「とういかなんで紺は、ベルトを使えたんだ?他の人は使えないはず。」

「あつそれは、俺が特殊な体質だからだよ。」

「どういうことだ?」

「それは、」

「我が騎士。それくらいにしてくれたまえ。いろいろめんどうになるからね。」

「あつ、そっか。」

「それってどういうことだ?」

「その先は、言えないんだ。ごめん、じゃあね〜。」

「なんなんだあいつ。」

「ウオズ、サンキュー。ここが俺の住むところより過去だったこと忘れてた。」

「改まってくれるなら問題ない。」

「さてと、家に戻るか。」

## 閑話 五臓六腑

俺達は現在の俺の家へ戻ってきた。

「ただいま!!」

「おかえりなさい。あら、今日もウオズさんがきたのね。」

「失礼いたします。」

俺達は俺の部屋に行った。

「そういえばいろいろ増えたな〜」

俺の机の上には、オーメダルとアストロスイッチ。そして、今日ゲットした、ワイザードリングと、ロックシードを置いた。そして窓を開けると二匹のトンボが部屋に入ってきた。一匹は分解されてランナーにはまって消え、一匹は、ロックシードに変わった。

「このトンボ達けっこう増えたな〜。」

「そうだね。」

「そうだ!!オーメダルとかアストロスイッチみたいな名前を付けてあげよう。いつまでもトンボだと違和感があるからさ。」

ということ、このトンボ達に名前を付けることにした。

「トンボだから、、ん、ん、ん？」

俺は、必死に考え始めた。

「ん、ん？」

「やっぱり一人で考えるとなかなか出てこないな。」

「我が騎士、他の言い方や英語にしてみたらどうだろうか。」

ウオズが助言をくれた。

「ウオズ、良い考えてじゃん。え、と、トンボは英語でドラゴンフライ、他の言い方は蜻蛉。影郎、かげろう、シャドウボーイ、シャドウ、あつ」

「何か思い付いたのかね。我が騎士。」

「シャドーセクトでどうかな。」

「どうしてだい？」

「トンボの別名は、カゲロウ。そして、俺のライダーの姿のインセクトからセクトを取って、シャドーセクト。」

「影の騎士か。良いじゃあないか、我が騎士。」

「これでこのトンボ達は、今後からシャドーセクトだ!!」

こうしてこのトンボ達は、これからはシャドウセクトというアイテムとなった。



「ウオズ？」

「どうしたんだい？我が騎士。」

「明日行く仮面ライダーのことが気になって。」

「そういうことかい？明日は、仮面ライダードライブと仮面ライダーゴーストのところへ行くか。」

「どういうライダーなの？」

「仮面ライダードライブは警察官の仮面ライダーで、仮面ライダーゴーストは偉人の力を使うライダーだ。」

「仮面ライダードライブはライダーなのに、ドライブって。ライダーはバイクなのにドライブって車の運転手かってwww。」

「我が騎士、それであっているよ。」

「へ？」

「仮面ライダードライブは車を使うライダーなんだ。」

「じゃあドライブバーじゃん。」

「そうだね。」

「じゃあゴーストっておばけってことになるけど。」

「仮面ライダーゴーストは、幽霊のライダーだね。」  
「ライダーっていろいろいるな〜。」

# 赤い車 フルスロットル

変身アイテムとシャドウドラゴン達をリユック

入れて仮面ライダーを探し始めた。

「ウオズ。今日は、どんなライダーに会うの？」

「仮面ライダードライブだ、我が騎士。」

「どんなライダーなの？」

「一言で言うと、車のライダーかな。」

「、、？車のライダー？」

「そう、車のライダーだ。我が騎士。」

「いやいや、車だったらドライブだから。ライダーだったら、バイクでしょバイク。」

「そんなこと言われてもそういうライダーなんだ。我が騎士。」

「まあ、名前はウオズに言ってもしょうがないよね。でどこにいるの？」

「くるま警察署だ。我が騎士。」

「車警察署？」

「いや、区留間警察署だ。」

「まあ、今から警察署に行くんだね。レッツゴー。」

俺達は、区留間警察署に行った。やはり、普通の警察署だった。

「ウオズここ?」

「そうだね。中に入ろうか。」

中に入った。

「すみません、ここに0科があると聞いたのですがどこに行けばよろしいでしょうか。」

「右手を真つ直ぐ行つたところですよ。」

「ありがとうございます。」

受付員の人は少し戸惑っていたが、通してくれた。

(一般人を入れていいのか。)

俺達は、言われた通りに行った。

コンコン

「失礼します。」

「なんだね、君は?」

「ここが一番偉い人と思われる人に言われた。」

「私は、中野紺と申します。今、仮面ライダーードライブを探しまして、調べているうちにここにたどり着きましたので、何か知っていることがあるのかと思ひましてここに来

ました。」

すると突然この男性で一番若そうな人が、飲んでいたお茶を吹いた。

「泊さん大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。」

（あつこの人がドライブかな？）

「それについてここも調べているんだよ。というか君、よくここに入れたね。」

「受付員の人が普通にここと言っていました。」

「は〜。ここも大分信用ないね〜。」

その時体が急に重くなった。

「なんだこれ？」

「我が騎士、これは重加速、どんよりだ。」

「ああ、ここではこのものがゆっくり動くことがあるんだ。」

「まじか。」

「これじゃまともに戦えないんじゃないか？」

「仮面ライダードライブはこれを完全無効化するんだ。」

「てかここでカルスが来たたら大分ヤバくないか？」

「そうだね。あいつら仮面ライダーの攻撃が効かないからね。てか、この現象自体カル

スの仕業だったら、勝てくない？」

「確かにそうばだね。」

一時的に重加速が終わった。

「ウオズ、まずカルスを探そうか。」

「そのようがよさそうだね。」

「では失礼しました。」

「おい、君達なんでもいろいろ知っている、行っちゃった。」

「とりあえずあの人達は置いといて、泊くん桐子ちゃん出動だよ。」

「了解」

俺達はカルスを探していた。

「しょうがない、カルスを一緒に探してくれるか、シャドウドラゴン達。」

俺はリュックからシャドウドラゴン達を放した。

「さてどこにいるのかな。」

すぐに一体戻ってきた。

「見つけたんだな。よし行くか。」

そのシャドウドラゴンについていった。

するとカルスがいた。

「居た!!」

「お前か、兄弟から話しを聞いている。お前に興味はない、どっか行つとけ。」

「そんな訳にいかないからね。」

「お前、ベルト無しにどうやって戦うんだよ。バカじゃないか?」

「やっぱり知ってるか。」

「我が騎士。今は勝ち目ない一旦戦いは避けよう。」

「そんなこと言っても。」

「カルスの後を追えば良いだけのこと。」

ウオズは小さな声で言った。

「それも良いかもね。」

「なに言っているか知らないが、俺はこの辺で。じゃあ。」

カルスはそう言うのと重加速が起こった。

「まさか!!」

「あ、そうそう。一個言っておくよ。俺は他の兄弟と違って、重加速を使えるから。」

「嫌な予感が的中した。」

「仮面ライダーの攻撃が効かないし、天敵のお前もまともに動けない。ここでお前を倒せば全て終わりという訳。」

「まさか、ドライブと放したのも。」

「ああ、お前は仮面ライダードライブを絶対庇うとするため絶対に俺を先に探し出そうとする。まあ、生身で戦うとは思ってなかったけどな。」

（こうなったら、仮面ライダードライブが来るまで持ちこたえるしか。）

「仮面ライダードライブを待っても来ないぜ。今、ロイミュウドと戦っているからな。」  
「え、」

「ということで、ここがお前の墓場だ!!死ね!!」

俺は初めて死を感じた。

（俺は、ここで死ぬのか?絶対やだ!!まだやってないことや、まだ取ってない昆虫もいる。第一、俺しか出来ないことをやろうとしてたんじゃあないのか?）「こんなところで殺られてたまるか!!」

突然閃光のようなものが俺の前を通り、カルスの攻撃を弾いた。

「あれが今回のアイテム!!」

俺は、掴もうとするが重加速のせいでちゃんと動けない。だが俺は、諦めずに手を伸ばした。

「もう少し、届け!!」

俺は、それを掴んだ。その時ある声が聞こえた。



（お主の気持ちはつきりと聞こえたぞ。私の力使うがよい。）

「なんだったんだ、いったい？」

その時俺は、重加速を完全に無効化していた。

「どうなっているんだ。いったい？」

「おそらくそれは、これ自体がシフトカーと同じ効果を持っているからと思われるね。」

ウオズは、クワガタモーターの物を持っていた。

「シフトカーか。」

その時、腕にいわゆるシフトプレスが付いた。

「なんだこれ。」

「それはシフトプレスだね。」

「おそらくこれを差せばいいんだよね。持ってた戦いずらいし。」

「動けたところで、俺が倒せるわけないだろう。」

「ああ。けどな、これにドライブが気づくまで足止めくらいは、できるわ!!」

俺はプレスがついている右腕を上挙げて。すると、今までのトンボ達が全部飛んで

来た。

「なるほど、これがこの力か。」

俺の前には、今までの武器のトンボが並んでいた。

「生身だし至近距離は危ないから、鎧武の弓とフォーゼの銃だね。」

俺は手に取ると、トンボが銃に変形、トンボ型の弓は盾モードにした。

「生身で戦おうってか。片腹痛いぜ。お前とは関わりたくなかったんだが、いいぜ、ここでボコボコにしてやるよ。」

カルスは、俺に近づこうとした。俺は、カルスの攻撃をギリギリ避けたが、ヤバかった。

「ヤバい。カルス本当に俺を殺しにきてる。こりや気をつけないとな。」

俺は、カルスに銃で牽制しながら攻撃を避け続けた。

「まだかドライブ。もうそろそろヤバいかも。」

「もう、終わらせようか？」

「やれるもんならやってみるよ!!」

「じゃあお構い無く。ライダーキック。」

その時だった。

スピードスピードスピード

「ぐあゝゝ。」

「大丈夫か君？」

「仮面ライダードライブ!!」

「なんで名前を？」

「そんなことはどうでもいいから、今はあいつを倒さないで。」

「わかったから君は、逃げて!!」

「後ひとつ、あいつ俺にしか倒せないんだ。」

「なんだって!!」

「それはどうしてだい？」

「ベルトがしゃべった!!」ってことはどうでもよくて、俺は仮面ライダーインセクト、中野紺だ。俺はわけあって仮面ライダーからベルトを貸してもらわないと変身出来ないんだ。だからベルトを貸してほしい。お願いだ!!」

「そんなこと言われても、不確定要素が大きすぎる。」

「無理言っていることは分かっている。お願いだ!!」

「どうする、ベルトさん？」

「うむむ、戦いには慣れてるようだが。」

ベルトさんはしばらく考えてから答えた。

「そんなに私の力が必要かね。」

「ああ、必要だ!!」

「仕方がないか、どうやらドライブの力が効かないのは本当らしいからね。」

カルスが普通に歩いてきた。

「おいおい、さつき攻撃全然効いてないぜ。そのやつの方が効いたぜ。」

「進之介、中野紺に私を貸そうじゃないか。」

「いいのかベルトさん。」

「その方が今は効率がよくさそうだからね。」

「ありがとう。」

泊さんは変身を解除してベルトさんを貸してくれた。

「させるか!!」

俺は、盾をカルスに投げて銃で盾を当てて攻撃した。

「ヤバかった。」

カルスは怯んだ。

「シフトブレスもだ。」

「ハイハイ。」

「ありがとうございませす。よしこれで!!」

俺は、右腕にあるトンボを抜きシフトブレスにはめようとしたが、羽が邪魔ではめれなかつた。

「えっ?」

そのとき、トンボの柄が付いたシフトカーが飛んできた。

「こつちか、じゃあこいつはいつたい？まあ、いいや。気を取り直して、キーとシフトカーを回して。」

「変身!!」

タイプドラゴンフライ

全体がドライブの緑色版だった。手には、トンボ型の大砲があった。

「これでお前とやりあえる。」

「面倒なことになったな。俺は立ち去ります。」

「待て!!」

鎧武のアーマーのトンボがカルスの行く手を阻んだ。

「くそっ。」

「改めて見ると、デカイな。」

「俺も最大出力でやるしかないか。どのみち、お前を倒さないとドライブを倒せなそう  
だ。」

カルスは、俺に拳を突きつけた。それに合わせて避けた。

「もう一発だっ!!」

「くそっ。」

俺は大砲で攻撃を受け止めた。

「お前らはなんでそんなに仮面ライダーを倒そうとするんだ!!」

「あつそれ。仮面ライダーの力を奪って、世界征服するため。」

「は?そんなことさせるかよ。」

「やれるもんならやってみるよ。」

「ああ、やってやるさ。」

俺は、カルスを離して銃口を向け打つ放した。

「これでとどめだ!!」

フルスロットル

ドラゴンフライ

「ぐあゝゝ!!」

カルスは四散した。

「ふゝゝ。」

「なかなかやるじゃないか。」

「まあね。」

俺は、ベルトさんを泊さんに返した。

「だから君は、仮面ライダーを探していたんだね。」

「まあね。あの時、名乗り出ていたら俺が死にそうな思いをしなくても良かったんだけど。」

「あそこの人達にもまだ言っていないから。」

「あつそうなんだ。」

「それは失礼しました。」

## 開眼 偉人のパーカー

「ウオズ、ここはどこ？」

「ここは、2015年仮面ライダーゴーストの世界だ、我が騎士。」

「仮面ライダーゴースト。おぼけだっけ？」

「ああ、仮面ライダーゴーストは幽霊だね。」

「で、ここにいてるわけだ。」

今、俺達は大天空寺にいる。

「ここに仮面ライダーゴーストがいるんだ。」

「その通り。」

俺達は、大天空寺に入った。

「すみません!!」

するとオレンジ色の着物姿のお坊さんが出てきた。

「ようこそ、不可思議現象究明所へ。今日は、どうされました？」

「いや、ここに天空寺尊さんがいらつしやると聞いて伺ったのですが。」

「たける殿ですね。少々お待ち下さいませ。たける殿!!たける殿!!」



奥からの青年が出てきた。

「俺に、何か用？」

「はい!!」

「なら、奥へどうぞで。」

「失礼します。」

俺達は、奥の部屋に連れられた。

「で、用って言うのは？」

「単刀直入に言うのと、ベルトを貸して下さい。」

「はい？」

「仮面ライダーゴーストですよね。」

「どうしてそれを？」

「俺は、仮面ライダーインセクトこと中野紺です。わけあって、ベルトを持ってないんで

す。ですので、貸して下さい。」

「いや、そんなこと言われても。」

「お願いします!!」

「理由を教えてください。」

「はい、ある集団が仮面ライダーを消そうとしているんです。」

「それで？」

「下手をすればたけるさんは死んでします!!」

「たけるは、もう死んでるわよ。」

奥から女性の人が出てきた。

「あつそうなんだ。」

「俺は、わけあつて今は霊体なんだ。」

たけるは、消えて見せた。そして俺の左に現れた。

「わあ!!」

「だから、俺はもう死んでいる。100日という制限付きだけどね。」

「そうなんですか。そんなことはともかく、その敵はなぜか知らないけど、ライダーの力が利かないんだ。」

「だから来たんだ。」

「ベルトを貸してくれますか？」

「貸そうと思ってもベルトが俺の体にくっついてるからどのみち貸せないんだけど。」

「そんな〜。」

「じゃあどうすればいいんだ!!」

その時、このシャドーセクトが現れた。何かを持っていた。

「それは、アイコン!!」

「これ、アイコンって言うんだ。」

シャドーセクトはアイコンを置くと、蓄音機に替わった。今で言うCDプレイヤーだ。

「これがここでのアイテムか。アイコンって?」

「アイコンには、英雄の魂が入っているんだ。」

「へえー。じゃあ、これにはどんな英雄の魂が入っているんだろう?」

突然、大きな声が聞こえた。

「大変ですぞ!! たける殿!!」

「おなりどうしたんだ?」

「寺の周りの木が次から次へ倒れていくという不可思議現象が起こっていますぞ!!」

「わかった。俺は、ちよつと行ってくるから中野くんは、」

「俺も行きます。」

「でも、戦えないんですよ。」

「俺、分かっちゃったんで。」

「?」

「たけるさん、行きましょう。」

「あっうん。」

「ウオズも行くよ。」

俺達は、現場に行った。

「たける殿!!」

「おなりここか。」

そこには、多くの木が倒れていた。

「凄いなこりゃ。」

「誰がこんなこと。」

「あいつらだろう。そこにいるんだろう。」

俺は、真後ろを見て言った。

「よくわかったな。」

「いや? テキトウだけど。」

「まあいい。仮面ライダーを消すまでだ。」

そいつは、俺達に突っ込んできた。

「よし。」

たけるさんは、変身するために構えた。

「たけるさん!! これを使って下さい。」

俺は、さつきシャドーセクトが持ってきた。アイコンをたけるさんに、投げ渡した。「わかった。」

たけるさんは、アイコンを押してベルトに装着した。俺はたけるさんのところへ行つた。

ア—イ

バツチリミナ

バツチリミナ

濃い緑色のおぼけが出てきた。次の瞬間、

「あっ!!」

たけるさんからベルトがとれた。

俺はとっさにベルトを掴んだ。

「(う)言(う)と。」

バツチリミナ

バツチリミナ

「変身!!」

カイガンインセクト

ベルトをセレクト

インセクト

俺は、濃い緑色のゴーストをまとい剣を構えた。

さっきのシャドーセクトが飛んできた。俺の前に来ると、二本の斧に変わった。俺は、斧に変わったシャドーセクトを取って構えた。

「お前は邪魔だ!!。」

インセクトは、攻撃を避けた。

「普通、名乗れよ!!」

「俺の名は、カルスだがっ。」

攻撃が飛んできた。

「何でライダーを倒そうとする!!」

「そんなもの、俺の仲間に聞いたろ。」

「くっ。」

インセクトは、斧で攻撃するも避けられてしまった。

「あまいな。」

「くそがー!!」

今度はジャンプをして地面に叩きつけたが、避けられてしまう。インセクトは、あの手この手使ったが全部避けられてしまった。

「これじゃ全然倒せないな。」

たけるさんが言った。

「この!!」

インセクトが、カルスに攻撃を仕掛けたが、カルスがいきなりフラッシュをした。

「うが〜!!」

インセクトの変身が解けてしまった。

「見たか私の技を」

紺の視界には、白い光しか見えなくなかった。

「うが〜!!」

インセクトは立とうとしたが、カルスの位置もウオズ達の位置も分からず無理に動けなくなってしまうた。

「あくあ。つまらないな。そうだ、君が知りたがっていた、私達が仮面ライダーを消そうとする理由から教えようか？」

カルスは、面白そうにした。

「実は!!私達を生み出したのは、未来の君なんだよ。」

インセクトの動きが止まった。

「ちなみに、仮面ライダーを消そうとしたけど、君が助けると確信してから倒しに来てる

よ。」

「嘘だ嘘だ!!」

インセクトは、叫び始めた。

「嘘ではない。未来の君は、オウマジオウが気に入らなくてね、君が仮面ライダーの力を  
使えるようにしているんだよ。実際、いままで倒した奴等、弱かっただろ。」

インセクトは、今気づいた。歴戦を戦った仮面ライダーが一撃も攻撃できなかったの  
に、敵が俺の攻撃を一撃くらったくらいで倒れていたことに。

「そういうことだよ。」

「嘘だ。そんなはずない。」

「これ以上君を傷めつけたら未来に影響するかもしれないから、これくらいしておく  
よ。次会ったときもつと強くなってるね。じゃあね〜」

紺の目には見えなかったが、カルスは光を纏い消えていった。

「くそ〜!!」

紺は、その場で立ち尽くして嘆いていた。



## 閑話 七転八倒

紺は、視界が開けると、たけるさんにベルトを返して現在に戻ってきた。ちなみに、ベルトはたけるさんが見つけたら消えてしまった。

「我が騎士。」

「、、、」

紺はなにも聞いていないようだった。

「我が騎士。」

「、、、」

「中野紺!!」

「なんだよ!!」

「カルスの話を目の当たりにするのではないよ。我が騎士。」

「我が騎士、我が騎士、言ってるけど、俺の未来ってどんな感じなんだよ!!」

紺は怒っているようだった。

「我が魔王に忠誠を持ち、、、」

「そこじゃない!!俺が聞いているのは、どうして騎士に成っているんだよ!!」

紺はイライラしていて言葉が曖昧になっていた。

「一回落ち着いてくれたまえ。」

「仮面ライダーを襲っているのが未来の俺って言われて落ち着いていられると思う?」

「それは、」

ウオズも戸惑っていた。

「もういい!!一人にさせてくれ!!」

紺は家に向かった。ウオズはその場で立っていた。

「そんなはずはないはずだ。」

ウオズはそう言っただけから立ち去った。

紺は家に帰っていた。

「未来の俺が、これを仕組んでいたって。」

紺は俺がやるはずがないと思ったがどうもあの言葉が気になって仕方がなかった。

「すう〜はあ〜」

紺は悩んでも仕方がないが、一度深呼吸をした。

「うん〜」

紺は考えたがやはり答えは出なかった。

「やつぱり、ウオズに聞いた方がいいのかな。だけど、ウオズにあんなこと言っちゃた

し。どうしたものかな?」

ピンポーン

インターホンが鳴った。

「はーい。あら、ウオズさんいらつしやい。」

「中野紺さんはいらつしやいますか?」

「紺!!ウオズさんが来たわよ!!」

「はーい。」

紺は応答して玄関に出た。

「なんの用事です。ウオズ。」

「仮面ライダーについてだ。」

「仮面ライダー?紺、なにか知っている?」

「お母さん何でもないから。表で話してくる。」

「あら、聞いて駄目だったかしら。」

紺は急ぎながら、ウオズを引っ張って玄関を出た。

「急になんだよ。仮面ライダーなんて言つて。」

「君が、未来の君がどうしてこんなことやっているか知りたいのではないか。」

「俺に全部の仮面ライダーの力を使えるようにするためだろ。」

「そうなんだがもうひとつあるんだよ。」

ウオズは、やれやれと思いつつ言った。

「それはどういふことだ!!」

紺は、そのことについてとても気になった。なんせ、自分が悪ということをお否定できるからだ。

「君が負ければ。最悪な未来が無くなるからだ。」

「え?」

紺は、言っている意味が分からなかった。

「勝てば今のジオウに勝てるだけの力が手に入り、負ければジオウは生まれ無くなるからだ。」

「それってどういうことですか?」

紺は、もっと分からなくなりました。

「オウマジオウが最低最悪な事態を作り出すらしい。」

「はあ!!」

紺は、何言っているのか分からなくなりました。

「つまりそれって、未来の俺が手のひらで転がしていったってこと?」

「だいたいそうだ。」

「はあくく。だったら、何でウオズは、って思ったんだけど、ウオズだよね。」

「そうだが。」

「性格変わった？」

「いや、変わっていないのだが。」

「？」

「ああ、そういうことか。今まで一緒にいたウオズとは違うウオズだ。まあ、歴史上ではウオズは二人出ている。黒ウオズと白ウオズだ。私はどちらとも違うウオズ。まあ、私の服が緑色だから、緑ウオズとも言ってくれ、最悪他のウオズと会ったときだけでもいいがね。」

「なら、ウオズでいい？」

「ああ。」

「話を本題に戻して。なら、黒ウオズはなんで俺のことを我が騎士って言ってたんだろう？」

「裏でこそそこそ動けるようにそうやって未来の君が言っていたが。」

紺は、未来を自分が悪い奴と思えなくなつた。

「でも良かった。これでのびのび生活できる。」

「で、どうするんだい？ 仮面ライダーを助けても助けなくてもいいのだけれど。」

紺は、心に決めていた。

「俺、仮面ライダーを助けることにするよ。」

「ほくく。」

「知っていて見捨てることもできないし。」

「君の好きにすればいい。で、どうやって過去に行くのだ？」

「あつ。」

紺はそのことを考えていなかった。

「どうやって過去に戻ればいいんだくく!!」

「やれやれ、これに乗って行けばいい。」

緑ウオズの頭上にワープホールが出てきてそこから大きなロボットが出てきた。

「なんだこれ!!」

「これはタイムマシーン。」

「タイムマシーンなのか。」

「そうだね。」

「くれるの!!」

「未来の君からのプレゼントだそうだ。」

「でもどうしたものかな？」

紺の部屋に入るわけないし、ましてや家の外に置いたで迷惑だし、と考えていた。「ならこれを。」

緑ウオズが紺に向かってなにかを投げた。

「おっと。これは？」

「これは、このタイムマジーンを小さくする物だ。試しに押しみてくれ。」

紺は、試しに押ししてみた。すると小さくなつて時計みたいになつた。

「おろろ!!」

「では、今日はこのへんで。」

「待つて。」

紺は緑ウオズに声をかけた。

「なんだね。」

「ウオズは、我が騎士とか言わなんだね。」

「我が騎士と言つた方がいいのかね？」

「いや、別にいいんだけど。」

「じゃあ我が騎士。」

「あ、言つた。」

「なんとなく、言つて見たかつただけだ。」

緑ウオズは歩いていった。